The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	雑録
Author(s)	
Citation	懐徳. 1925, 3, p. 47-59
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88715
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

雜錄

△大正十三年度懷德堂記念會事業概要

一、定日講義

本講義ハ聖經賢傳及ビ本邦古典ヲ講ジ德性ヲ涵養シ我國民性及ビ國民道ノ淵源ヲ究ムルニ資スルヲ以テ目的トシ前年度ニ引續キ毎週四回トシ月水木日曜之ヲ行フ而シテ講義時間ハ月水木ノ三日ハ各午後七時ヨリ同九時マデ二時間日曜ハ午前九時ヨリ十時マデ一時間トス來年度ニ於ケル講義課目左ノ如シ但○印ハ本年度ヨリ續講ノモノナリ

月曜　韓非子（講師文學士稻束猛）詩經（講師大阪高等學校教授文學士　財津愛象）

水曜　先哲叢談（財津講師）理學宗傳（教授文學士松山直藏）

木曜　萬葉集（講師第三高等學校教授文學士　林　森太郎）周易程傳（松山教授）

日曜　孟子（松山教授）

本年度ニ講了セシモノ左ノ如シ

論語（松山教授）孝經（財津講師）新古今集。新葉集（林講師）

聽講生ノ籍ニ名ヲ列スルモノ八十名毎回出席スルモノ二十名乃至五十名ナリ日曜ハ聽講隨意ナルガ聽講者二十名乃至三十名ナリ

一、文科講義

本講義ハ東西ノ名著ヲ講ジ文科ニ屬スル學術ノ精深ナル研究ニ資スルヲ以テ目的トシ東西兩洋ヲ兼修セシムルヲ主義トシ前年度ニ引續キ毎週一回午後六時ヨリ同九時マデ哲學文學ノ二科ニツキテ三時間講義ヲ行フ來年度ノ課目左ノ如シ但○印ハ本年度ヨリ續講ノモノナリ

哲學（第一、三、五金曜）

○『カント』プロレゴメナ、ツウ、エニー、ヒユーチユアー、メタフイジツク（講師京都帝國大學文學部教授　文學博士朝永三十郎）

○朱子語文精要（松山教授）

文學（第二、四金曜）

○雪山俊夫編レーベン、ウント、ビルヅング（講師京都帝國大學文學部教授文學博士藤代禎輔）

○仕詩偶評（講師京都帝國大學文學部教授　文學博士鈴木虎雄）

本年度ニ講了セシモノ左ノ如シ

『カント』グルンドレーグング、ツル、メタフイジック、デル、ジッテン（藤井講師）

聽講生ノ籍ニ名ヲ列スルモノ三十名毎回ノ出席者ハ十五名乃至二十名ナリ

一、定期講演

本講演ハ高等ナル學術的知識ヲ普及シ文化ノ向上學術ノ研究ニ資スルヲ以テ目的トスルモノニシテ前年度ト同ジク毎土曜日午後七時ヨリ同九時マデ講演ヲ行ヒ京都帝國大學文學部教授之ガ講師タリ

本年度ノ講師並ニ講演題目左ノ如シ

日本語ノ由來（五回）　講師文學博士　新村　出

有史以前ノ日本（五回）　講師　同　濱田　耕作

古代中央亞細亞ノ文明（八回）講師同　羽田　亨

周易概說（七回）　講師　同　高瀨武次郎

家庭教育ト社會教育（五回）講師同　野上　俊夫

日本ニ於ケル社會生活ノ發達（五回）　講師　同　西田直二郎

來年度ノ講師幷ニ講演題目左ノ如シ

大乘佛教ノ要旨　講師文學博士　松本文三郎

法制ノ發達　講師　同　三浦　周行

國字ノ話　講師　同　吉澤　義則

支那ノ政治文化及社會　講師　同　矢野　仁一

聽講者毎回五十名乃至百名ナリ

一、通俗講演

本講演ハ一般市民ノ常識ヲ養ヒ品性ヲ向上セシムルヲ以テ目的トスルモノニシテ前年度ニ繼續シ七八兩月ヲ除クノ外毎月一回之ヲ行フ十三年中ハ京都帝國大學理工醫諸學部ノ教授ヲ聘シ科學ニ關スル講演ヲ行ヒシガ十四年ハ同大學經濟學部ノ教授ヲ聘シ財政經濟ニ關スル講演ヲ行フ講師幷ニ演題左ノ如シ

一月　國民ノ海外發展問題講師法學博士山本美越乃

二月　我國ノ租稅體系ニ就テ講師同　神戸　正雄

三月　經濟ノ發達（一）　講師經濟學博士本庄榮治郎

四月　同　（二）　講師　同　同

五月　我國現時ノ財政ニ就テ　講師法學博士　小川鄉太郎

六月　大戰ノ回顧ト戰後ノ貿易逆調

九月　『天運人事數無異同』トノ說ニ就テ　講師　法學士　小島昌太郎

十月　世界經濟ノ特質　講師　法學博士財部　靜治

十一月　農村問題ノ思想的背景　講師　法學士　作田　莊一

十二月　經濟ト道德トノ關係及ヒ合致　講師　法學博士河田　嗣郎

右ノ外臨時講演トシテ穗積法學博士ノ『家族制度ニツキテ』ト題スル講演ヲ行ヘリ聽講者約三百名ナリ　講師　法學博士田島　錦治

一、素讀科

本科ハ德性涵養ノ一助トシテ少年ニ孝經四書ノ素讀ヲ課スルモノニシテ前年度ト同ジク每週月、木土ノ三日午後一時ヨリ同六時ノ間ニ來堂願ニ授ク生徒五名乃至八名ナリ

一、記念祭

十月五日本堂先師儒記念祭典ヲ執行シ終ッテ左ノ記念講演ヲ行ヘリ

儒家ノ修養法ニ就テ　文學博士　宇野　哲人

竹山先生ノ經濟思想　經濟學博士　本庄榮治郎

大正十四年度懷德堂記念會事業概要

講義講演等ノ事ハ總テ十三年度ノ事業ヲ繼續スルノ外文學博士西村時彥著『懷德堂考』ノ出版、講演集及ビ書庫研究室ノ建造皆遠カラズ其ノ實現ヲ見ルベク準備中ニアリ

△大正十三年懷德堂記念會恒祭

大正二年財團法人懷德堂記念會設立せられ、尋いで同五年懷德堂重建せられてより、每年十月初旬に於て懷德堂師儒諸先生の靈を祀るを常とす。陰曆十月五日は舊懷德堂開講の日なるに因みてなり。大正十三年十月五日（日曜）恒祭執行せらる。記念祭幷講演次第左の如し。

第一令　午後一時

着　席

第二令

褒　幃（舊門人幷岡田玄碩奉仕）一同起立敬禮

獻　饌（同）

理事長祭文朗讀　敎授理事評議員幹事委員起立

教授、理事長、評議員總代、府知事、市長、講師總代、來賓總代、遺族總代、門人總代、聽講生總代、素讀生總代順次拜禮

第三令

撤　饌（舊門人奉仕幷岡田玄碩奉仕）

垂　幃（同）一同起立敬禮

會務報告（常任幹事）

表彰狀素讀修了證幷賞品授與

理事長挨拶

第四令

記念講演

竹山先生の經濟思想　京都帝國大學教授經濟學博士　本庄榮治郎先生

儒家の修養法につきて　東京帝國大學教授文學博士　宇野　哲人先生

祭典は嚴肅に執行せられ終了の後、記念講演に移り午後五時を以て畢る。來賓聽衆堂に滿ち、頗る盛會なりき。因みに當日表彰せられしは、大正十年以來三年間定日講義または日曜朝講の聽講を繼續せし人々にして、左記七名なり。各々東塾讀書記一部を賞與せらる。尙孝經、四書の素讀を修了せしもの左記二名なり。

表彰狀を授けられしもの

中川幸三　古下秀夫　阿部剛一（定日講義）

長岡義卿　平田武藏　森口定藏　千葉傳次（日曜朝講）

素讀修了者

佐々木洋士男（五經修了）岩淵正一（孝經四書修了）

尙每年の恒例に依り、講演終了の後講師を主賓とし當日の來賓を陪賓として、永田理事長の請宴大阪ホテルに開かる。主客を合せて二十餘名。歡を罄くして散せしは、九時の頃なりきといふ。

△大正十四年東山春宴

東山春宴とは永田懷德堂記念會理事長が、每年新春に於て、懷德堂の爲めに講演講義の勞を執らるゝ京都帝國大學諸教授に對し、謝悃の意を表せらるゝ請宴にして、洛東左阿彌樓に開くを常とす。大正十四年一月八日春宴を同樓に開かる。荒木京大總長を始め、京大諸教授幷に當時滯洛中の大久保評議員等主客を合せて三十有二人。近年稀れに見るの盛會なり

しといふ。席上永田理事長其の携へ來れる一大唐扇を出して、諸客の揮毫を乞はる。總長荒木先生先づ題するに和以致祥の四大字を以てせられ、高瀨惺軒先生之に次いで、吟風弄月の四字を題し、鈴木豹軒狩野君山兩先生等亦順次各々其の姓名を署せられ、未だ周遍するに至らずして已みきといふ。

△大正十四年開講式

毎年第一期の初頭に開講の式あり。敎育勅語の捧讀ありて後、敎授の告辭あり。今年は一月十二日に行はる。敎授の告辭左の如し。

茲に大正十四年の春を迎へて、本年第一期の講義を開始することは、御同樣欣快に堪へぬ次第であります。一日不見如三秋と申す句がありますが、三週間の休講は何となう待ち遠ほしく感ぜられ、一日も早く諸君と是の堂に相見たい心地がいたしました。

本年は懷德堂が定日講義を開始して以來、第九年でありまして、今一年經ちますと、數の一小成である十年に達するのであります。聽講者は其の數一定せず、猶ほ潮の干滿あるがごとく、時に多きことあれば、また少きこともありますが、幸に今日まで事業の續行を見、今後益々盛んならんとするの徵候の見えまするのは、洵に喜ばしきことに存じます。

定日講義の目的は、德性を涵養し、また學術の研究に資するにあります。凡て人間は天賦の德性を具有しておりますが、この德性を涵養し、人心を正うするものは、所謂聖經賢傳に在ることを固く信じて、この講義を行つて居るのであります。又一には古來世界の一大文化たる支那の學術を研究するに資せんと欲するのであります。萬葉集の一科は本堂先師儒が國學を研究せられし遺風を傳ふるものでありまして、亦本邦古典によりて我が國民性幷に國民道德の淵源を究むるに資せんと欲するのであります。

本堂は他の學校とは異りて、年限を定めず、資格を與へず、また男女を擇ばず、凡そ修養に志ある人は、何人と雖も自由に來りて學ぶことが出來ます。凡そ人間の學問修養は學校にて修業する時期

に限らるゝものでなく、着衣喫飯と同じく、一生を通じて、何れの時にも何人にても必要なるが故に、この須要を充たさんために、主として已に一定の職業ありて、獨立の生計を營める人々のために行ふものであります。故に其の講ずるところは一定の時間内に一定の課業を修得せしめんとするものではなく、一日聽けば一日の益あり、二日聽けば二日の益あり、一月聽けば一月の益あるものであります。されば之により直ちに職業を得るの利便にはなりません。此れは特に諸君の了解を望む點であります。

本堂に來らるゝ人々は、其の年齡學力職業一樣でありませぬ。故に各々其の適せらるゝところに從ふて、之を利用せられんことを望みます。春秋に富み、學術を研究せやうと志さるゝ人は、其の心を以て之を利用せられ、進んで研究法などを問はるゝもよろしい。また學術的研究に從事するの年力なき人達は、よろしく聖經賢傳を翫味して、專ら體驗を力められ、安心立命を得て立派なる人格を養はれんことを望みます。

尙ほ本堂の事業として、定日講義の外に文科講義があります。東西の名著を講じ、哲學文學二科につきて、深く研究せんとする人々のために、之に資するものであります。

また定期講演は、毎週一回京都帝國大學文學部教授の專門的研究を平易に述べらるゝ學術的講演でありまして、大學の講義を平易に聽き得るもので、此れは他の地方にては見られざる、大阪人特別の智識的幸福であります。又通俗講演といふがあります。毎月一回百科の學術に關する講演であります。此れ亦大學のそれ〴〵專門諸教授の講演で、本年は財政經濟に關する講演であります。

諸君は以上の講義講演を成るべく善く御利用なされて、修養に資せられんことを望みます。

△秋季探勝會

大正十三年十一月二十三日、新嘗祭日を以て探勝會を催す。朝八時阿部野橋停車場に集合せしもの、松山會長財津名譽會員外十七名。九時發電車に乘り、十時長野驛に着す。此處より觀心寺迄約二十五町緩

歩して十一時寺門に達す。住職永島眞龍師執事福角淳光師に迎へられて、中院に息ひ茶菓を饗せられ、次で本堂に案内せられて、本尊七星如意輪觀音を開扉し拜禮す。こゝにて住職の緣起畧說を聽聞し、それより　後村上天皇檜尾山陵に參拜し、陵を降りて楠公の首塚を弔ふ。傍に筱崎小竹先生撰文幷書楠公首墓碑あり。約五百字の長文なり。塚前に石燈籠あり。銘に曰。忠廻斜日。義凌淸霜。楠公之元。千歲如生。と。之れ中井履軒先生の書にして、文字も亦楠公の元と俱に活けるが如きを覺ふ。夫より開祖道興大師の廟に賽し、寶物陳列館に至り、楠公の遺物其他多數の國寶を參觀し、中院に還りて行厨を開き晝飯後古文書集を拜觀す。之れは古文書壹百貳通を十卷に裝緝せしものにして、世に觀心寺十卷文書と云ふものなり。內容は　後醍醐天皇　後村上天皇　長慶天皇　後龜山天皇四帝の綸旨敎書國宣、南朝公卿の書翰、楠正成正行正時正儀の書翰なり。午後二時、同寺を辭し、山徑の捷路を取りて、紅葉の名所延命寺に至り役僧に迎へられて客殿に通れば、庭前の老楓空を蔽ひ、渥朱淡紅靑黃と相雜はり、五采陸離、晩暉を帶びて燦爛、天成の繡を織り成せり、滿地の落葉亦錦を鋪くに似たり。一行驚心駭目言ふところを知らず。茶菓の饗應を受け、それより一行の爲め特に陳列せられたる寶物を拜觀す。狩野安信筆花鳥圖屏風一双、狩野洞伯筆烏反哺孝圖、鳩三枝禮圖二軸、狩野洞春筆孟宗採筍一軸、素光寺遍勝和尙筆孔雀明王大幅一軸今より五百六十年前のもの、聖德大子御筆都率內曼荼羅國寶一軸、雪舟筆十六羅漢大幅一軸なぞは吾人の目を惹きしものなり。其他佛畫祖像等一百七十餘幅ありと云ふ。次に釋迦堂に至り、本尊を開扉して禮拜す。本尊は赤栴檀釋迦如來の尊像にして、身長二尺二分、印度の毘首羯磨の作三國傳來のものに係り日本三體の隨一にして國寶なりと云ふ。それより境內を逍遙して紅葉を賞觀し、臥龍梅、夕照楓、棲蛇銀杏の三大樹、弘法大師御手植の紅葉等を見て、午後四時過同寺を辭し、長野驛六時發の電車にて歸阪せり。

△定期總會

大正十四年二月十五日（日曜日）懷德堂大講堂に於

て、堂友會の總會を兼ねたる冬季茶話會を開く。先づ小講堂には三宅石菴、五井蘭洲、中井甃菴、中井履軒、諸先生の遺墨を陳列し、會員の展覽に供したり。左に掲ぐる目錄の如くにして、何れも諸家珍藏の逸品なれば、親しく先賢諸先生の光風霽月に接するの思あらしめたり。

定刻を過ぐること數十分、午後二時松山會長中井名譽會員及普通會員二十餘名着席す。幹事岡田玄碩事業報告をなし、幹事會計主任太田勘兵衛會計報告をなす。收支計算書は次に掲ぐるが如し。次で堂友會々則中改正の件に關し、左の議案を附議し、幹事小沼量平改正の要旨を說明し、異議なくして原案に決せり。

一、第九條中醵出の下『シ』を『ス』に改め『會報印刷費に充つ』の八字を削除す。

一、第十條中『右』の字を削り、『但幹事』の三字を加ふ。

次で幹事改選の議に移り、全部重任を希望する說と更に會長の指名を希望する說と兩樣ありしを以て、之を起立に問ひたるに、更に會長の指名を望むもの多數なりしかば、會長は岡田玄碩、太田勘兵衛、小沼量平、野口幸雄、山本楢信を指名し、且つ附言して云ふ。舊幹事の中にて飯沼溜三郎、平野得三の兩氏は家事の都合上勤まり兼ぬる旨にて、曩に內願の次第もありたれば、兩氏の代りに野口山本兩氏に御苦勞を請ふことゝせりと。

右にて諸報告、會則の改正、幹事の改選等總會は結了せるを以て、茶話會に移り、松山會長より左記の御話あり。尙ほ今後は會報の發行も每年四月、九月、一月の三回位、成るべく期月を誤らざる樣に發行すべければ、堂友諸子よりも精々寄稿ありたしとの希望の辭あり。中井名譽會員は碩園先生追悼錄を讀みて感ありとて、先づ西村先生を五井蘭洲先生に比擬して其の功業を稱したる後、此の追悼錄は西村先生を永遠に傳ふるのみならず、堂友諸君の情誼の濃やかなるを窺ひ見るべく、又懷德堂の堂風を廣く知らしむることを得べく、誠に我が意を得たりとて、賞賛の辭を吝まざりき。各員もまた胸襟を披きて、談笑に時を移し、午後五時過散會せり。

松山先生の御話

堂友會は一個の修養團にして、其の目的とするところは、懷德堂の趣旨に遵ひ、德性の涵養。智識の向上、堂友の親睦を圖るにあります。德性の涵養は一朝一夕にして出來得るものではなく、必ずや永き間に亘りて、不斷の工夫を施して始めて其の効果を見るものであります。昨年西村先生の歿せられし際に於ける諸君の哀悼思慕の誠意、今回追悼錄を編印するに至りし諸君の熱誠努力は實に感涙を催さん許りであります。此れ諸君が日比ろ涵養せられたる美はしき德性の發露である。これは一は西村先生の人格の感化に由るとはいへ、一は諸君の斷えず聖經賢傳に親みて、其の德性を涵養せられたる効といふべきであります。

西村先生は曾て諸君に勸むるに心得體驗の學を以てせられた。心得體驗の學とは今日の所謂學術的討究の如き純粹なる智的討究に非ずして、道德の實踐躬行によりて、聖經賢傳を體悟するの謂であります。學術的討究によりて眞理を獲得することは、決して輕ろんずべきことではなくして、人間の當さに力むべきところでありますが、誰人にも强ふべきではありませぬ。たゞし道德的修養なる心得體驗の學は誰人も當さに務むべきことでありまして、又誰人もなし得ることであります。故に私は切に今後も益々諸君が心得體驗の學を力められんことを望みます。この心得體驗の學は加す〳〵諸君の德性を涵養し行くこと丶存じます。

次に諸君堂友會員の爲さるべき適當な仕事と思はる丶もの丶二三を提言したいと思ひます。

懷德堂の先儒甃菴先生は五孝子傳を、竹山先生は節婦記錄をものせられ、世の善行者を表彰し、且つ傳へられました。この事は世道人心に關係するところ大なるものがあります。今は聖代の有難さに、孝子節婦義僕など善行者の表彰せらる丶ことでありますが、これら善行者の善行を尙も細かに調らべて、之を記錄し、編して善行者の列傳となし、之を世に傳ふることなどは、有益なること丶もに、一は懷德堂先儒の遺風を傳へて面白きこと丶思ふ。

大阪の文化の研究は諸君の任務の一でありましやう

其の資料は限はありますまいが、他日完全なる文化史の根據となるべきものを作ることが必要であらうと思ひます。それは文化史の年譜を作ることなど其の一でありましやう。凡そ文化の消長に關係ある大事は勿論のこと、學者名人の生卒往來著述事業など、みな其の年月の知らるべきものは、之を譜にして、精確なる年譜を作り置けば、何時までも立派なる參考となりて、其の努力は永く消滅することなからうと思ひます。賴春水の在津紀事や、廣瀨旭莊の日間瑣事備忘錄などの如きも、必や年譜の材料多かるべしと思はれます。

最後に學者名人の手簡など、また文化資料の一なれば、博く採訪輯錄せらるゝなども、一の研究方法であつて、諸君の爲さるべき仕事の一でなからうかと思ひます。

三宅石菴　五井蘭洲、中井甃菴、中井履軒四先生遺墨展覽目錄（大正十四年二月十五日於懷德堂）

△懷德堂藏

一三宅石菴先生遺墨帖　一帖

一五井蘭洲先生習字帖　一帖

△中井木菟麿君藏

一朝鮮本楚辭集註　二冊

故西村碩園先生稽神ノ書『追悼錄』三四頁追悼遺事三篇參照

一五井蘭洲先生書習字帖　二帖

履軒先生の習はれしものなりと云ふ

一五井蘭洲先生書　一幅

文曰「鶴舞千年樹」

一同先生書草書雙幅　二幅

文曰『小艇水雲洞口孤琴穩月山陰郢曲向來誰和林泉亦有知音出岫雲非有意忘機鳥亦知歸莫話城中舊事與君同是荷衣　列菴』

一中井甃菴先生書　一幅

文曰『有時自發鐘磬響　甃菴書』

一中井甃菴先生詩　一幅

文曰『病起喜觀竹竹繁梅雨時最高新綠濕知是雨前兒　余書素拙且老病兩攻無意操毫久矣偶有寄三張楮於又叟憑請者乃肆一張試顆舊詠竹五絕果

然以叟余故交不可以辭也乃命男善德代書其二以
掩余劣云　仲春之望　甃菴書』

一中井甃菴先生贊　泉冶醉墨菊

贊曰『墨菊一幅泉冶者所畫冶時飲一斗口囁嚅不能言足踉蹌不能行而運掌搏之能存象形一奇也今也則亡酒不忍靈殘糊繕而誌想戊戌孟春望夜事也
甲子正月　甃菴書』

△稻東猛君藏

一三宅石菴先生書　一幅

文曰『雨滴梧桐秋夜長』

一同先生書　一幅

文曰『香一炷酒三盃明月出清風來』

一五井蘭洲先生書　一幅

文曰『林花着雨臙脂落』

△清海復三郎君藏

一三宅石菴先生書　一幅

文曰『五柳先生本在山偶然爲客落人間秋來看月多歸思
自起開籠放白鷴　雍陶和錄明府惟舊山
唐絕一首先人万年所書也　三宅正誼審定』

一同先生書　一幅

文曰『庚戌新正因人贈福壽草偶賦一律
坊中正月自堪奢處々青松映白砂客對蓬萊盤上盞
兒窺福壽草邊花宿將淨閣設新餅晨汲甘泉煎好茶
從此三春多少事都爲佳興入詩家　石菴』

『俳諧若綠跋

こゝに心ある人には聊爾に物は見せられす
月花はもとより時雨夕立霧霞つむれ木の端
□虫の出くすみも目さへつくと是非一ひね
りしてたゝとほさす其人は誰讃岐の寸木翁
なりされはこそ今年の旅がやかて此若綠と
はなりたれと泉石いふ

俳諧花市跋

花はうらねど花の市とは彌生にたてはなり
けり花の市〳〵集は市と同し名名もおもし
ろしめされよ句もおかしめされよ風流の物
かひ牙僧は泉石』

一五井蘭洲先生書　一幅

文曰『努力愛春花莫忘歡樂時　子祥』

一同先生筆　墨竹圖　一幅

△鹿田靜七君藏

一五井蘭洲先生墨竹圖　一幅

△島田源三郎君藏

一中井履軒先生自畫賛　一幅

文曰『問余何事栖碧山笑而不荅心自閑桃花流水
肯然去別有天地非人間　履軒幽人』

△懷德堂藏

一五井蘭洲先生書　一葉

文曰『雙飛新雁落回塘蕎麥花開晚稻香
村北村南采綿女相呼一路送斜陽』

秋郊即事

『落葉起秋聲孤唫獨夜燈鄉書千里外幾回哭
親朋　客況　子祥草』

○懷德堂々友會會計報告

第一回　自大正十二年十一月六日　至大正十四年二月十三日

收入ノ部　四三円八〇〇

大正十二年十一月六日

大正十二年第三期分會費

同十一月九日　四〇円〇〇〇

今川せい殿今川まさ殿今川ふさ殿中川幸三殿各
拾圓宛寄附金

同十二月六日　五二・〇〇〇

永田理事長ヨリ發會ニ對シ金壹百圓寄附ノ内發
會式當日辨當料ヲ支拂タル殘金受入

大正十三年六月五日　壹〇・〇〇〇

今川せい殿寄附金

同十二月七日　壹參〇・〇〇〇

永田理事長ヨリ碩園先生追悼錄刊行ニ付寄附金

同十二月十八日　壹〇〇・〇〇〇

小沼量平殿外十名寄附金

同十二月十八日　壹〇〇・〇〇〇

上野愛甲兩名譽會員寄附金

大正十四年一月十二日　五〇・〇〇〇

小倉名譽會員寄附金

同二月十二日　六五・〇〇〇

追悼錄五十部記念會ヘ讓渡料

同二月十三日　壹〇四・〇〇〇

追悼錄八十部小口讓渡料假入

同　銀行預金及振替貯金利息　參●九二〇

同　懷德第一號讓渡代　五九●〇〇〇

同　大正十三年第一期分會費　壹〇〇●二〇〇

同　同第二期分會費　九六●〇〇〇

同　同第三期分會費　六三●六〇〇

合計金壹千〇拾七圓五拾貳錢也

（內會費ハ參百〇參圓六拾錢）

支拂ノ部

發會費　三三円六六〇

備品費　壹九●八八〇

振替口座基金　壹〇●〇〇〇

懷德第第一號印刷費其他　壹五二●一二〇

茶話會費　二八●〇八〇

碩園先生追悼錄印刷費其他　六六三●〇八〇

會費集金費　三●七八〇

雜費　壹八●五二〇

合計金九百貳拾九圓拾貳錢也

差引金八拾八圓四拾錢也　殘金有高

右之通御座候也

大正十四年二月十五日

會計主任　太田勘兵衛

（備考　現在會員七拾八名）